

【論文】

琉球列島における先史文化の形成と人の移動

——島嶼間の人文地理的關係に注目して——

木 下 尚 子

Formation of Culture and Movement of People in Prehistoric Ryūkyū – With focus on the mutual human- geographical relation between islands**Naoko KINOSHITA**

要旨

A unique prehistoric culture (Fringing Reef Culture) developed in the Ryūkyū islands between Kyūshū and Taiwan together with the formation of coral reefs. This paper discusses its characteristics, combining Naoichi KOKUBU's division of the islands into three cultural areas, and a classification of the relation among the islands based on their geographical relation to their cultural bases Kyūshū or Taiwan respectively and on their mutual distance being within eyesight or not. An investigation of examples referring to both concepts concludes that the movement of people and thus development of cultures only occurs if either (1) the neighbouring island is within eyesight, or (2) an economic relationship exists. The Yaeyama archipelago "cannot be seen from Taiwan but Taiwan is within eyesight from Yaeyama", but it was cut off culturally over a long period of time; most probably because of features of the culture of Yaeyama itself. Since fringing reefs developed at the east coast of Taiwan like in the Ryūkyū islands, the sea between Taiwan and Yaeyama can be understood as the southern border of the Fringing Reef Culture.

キーワード：琉球列島、移動の動機、目視、裾礁型文化、文化の安定性、八重山諸島、台湾島

1. はじめに

琉球列島は南北1260kmを弧状につなぐ約200の島々で成り立っている。その北には九州島があり、南の端には台湾島があつて、地図上では連続したわかりやすい配置をなす⁽¹⁾(図1参照)。九州島と台湾島は琉球列島の島々に比して規模が各段に大きく、それぞれに独自の文化を形成しているため、周辺の島嶼に対して文化的基地の役割を果たしうる。

先史時代、九州島がその南に連続する島々に対して文化的基地の役割を果たしていたことは、河口貞徳氏や高宮廣衛氏らによる研究によって明らかにされている(河口1981、高宮1978)⁽²⁾。すなわち琉球列島の北半地域(沖縄諸島以北)の土器は一貫して九州島の影響を受け、それとの関係において展開してきた。これに対し、琉球列島の南部を構成する先島諸島(宮古諸島・八重山諸島)は、先史時代を通してこうした動きとは無関係であった。しかし先島諸島はもう一方の文化的基地である台湾島に近く、その文化形成には台湾島の影響が当然考えられる。ただ遺跡においても遺物においても、

台湾島の影響が及んでいたことを明らかにできていない⁽³⁾。つまり文化基地の島との関係でみると、琉球列島の北半は九州との関連で説明されるが、南半は台湾島との関係が不明確であり、その文化は考古学的に孤立しているといえるのである。将来台湾島と先島諸島との関係を示す証左がみつかり、新たな説明がなされる可能性はもちろんあるが、台湾島との文化的関係が緊密でなかったことに変わりはない。先史時代における琉球列島のこうした「北に開き、南に閉じ気味」な文化的位相はどのように形成されたのだろうか。

一般に島嶼世界において島から島への文化伝播は、人が渡海してはじめて達成される事象であり、そのためには装備や技術、知識の蓄積が必要である。この点で海上の文化伝播は陸上のそれより意志的な行為を伴う。小稿では人々の移動の動機に注目し、これを促す要因について分析をおこなう。すなわち、要因の基盤となる地理、自然環境、先史文化をとりあげて移動につながる要因を整理し、琉球列島の「北に開き、南に閉じ気味」な文化的位相の成り立ちについて考察を試みるものである。

2. 島嶼間の人文地理的關係

人の島への移動の動機としてもっともわかりやすい事象は、目視できる島の存在であろう。ここで検討する対象は先史時代の人々なので、この場合の目視は裸眼でみることをさす。また島をみるためにもっとも条件のいい場所からの眺望によることとする。二つの島の関係を想定してみよう。二つの

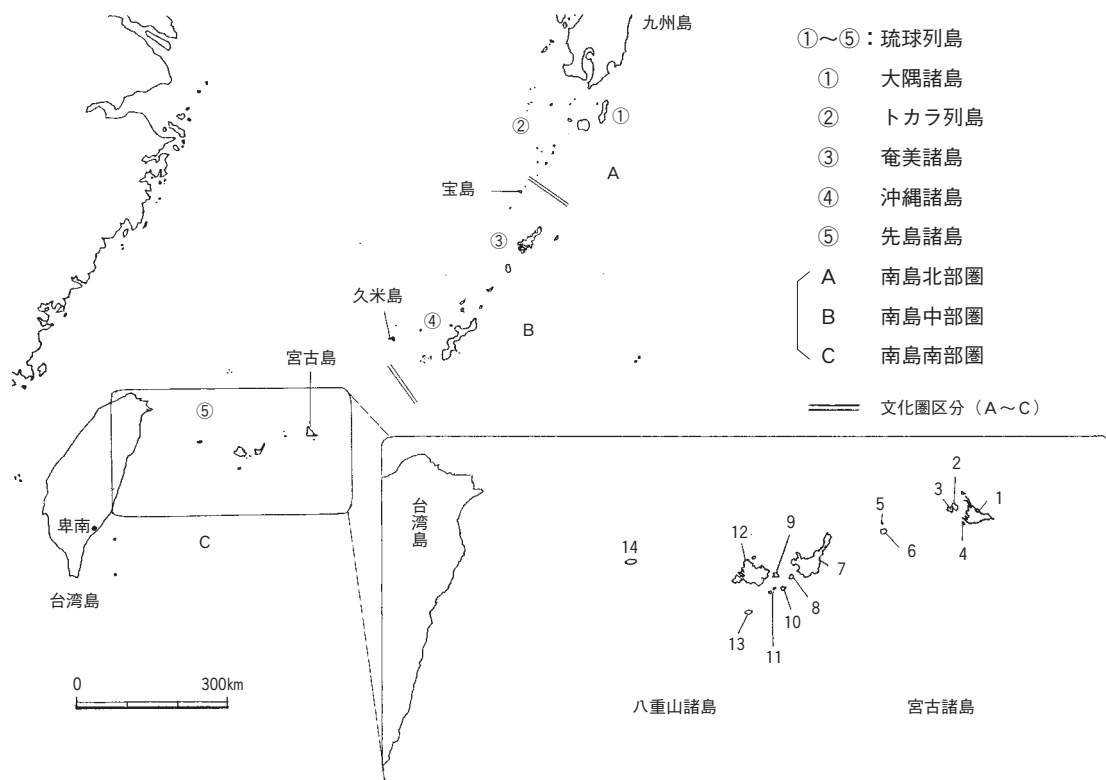


図1 九州島・琉球列島・台湾島

島は一方から他方が見えれば、その逆も同じである場合がほとんどであるが、双方の距離が大きい場合、希に一方から見えても他方からは見えないことがある。例えば一方にのみ高い山があったり一方だけが大きな島であったりし、もう一方が平定な小島であれば、小島からは山や島影が見えても、反対側からは小島や低く平らな島は見えない場合がある。こうしたことは物理的にみればあり得ないのだが、人間の視力を主体とすれば起こりうる。サンゴ島である低島⁽⁴⁾や、火山島の点在する琉球列島では、実際にこのような現象が生じているからである。一方九州や台湾のような文化基地になる島は、多くの島から見えるので、隣接する島がよほど離れていない限り目視できる。以上の視点で島と島との地理的関係を整理したのが表1である。この場合、1年のうちの気象条件のいい日に1日でも島に見えることがあれば、それを目視できる島とした。

表1. 島と島との人文地理的關係

島(a)から 島(b)を目視 できるか	島(b)から 島(a)を目視 できるか	実例 島(a)と島(b)の関係	分類
できる	できる	奄美大島(a) 喜界島(b)、九州島(a)と種子島(b)	I
	できない	多良間島(a)と宮古島(b)、水納島(a)と宮古島(b) 与那国島(a)と台湾島(b)、波照間島(a)と台湾島(b)	II
できない		久米島(a)と宮古島(b)	III

島からの目視による関係は以下の3類にまとめられる。

I：2島双方から互いを目視できる関係。

II：一方からは他方を目視できるが、他方からは一方を目視できない関係。

III：2島双方から互いを目視できない関係。

この分類をもとに、琉球列島内の48島を選び、これに九州島と台湾島を加えて、島ごとに番号をつけ、これを北から南に向かって配列し、ある番号の島から目視できる南北の島の番号を記入した⁽⁵⁾(表2)。

これによると、琉球列島のほとんどの隣接する島同士の関係はIであるが、IIが2箇所、IIIが1箇所ある。琉球列島は人文地理的に、沖縄諸島と宮古諸島の間で目視可能な関係が途切れており、宮古諸島の間、および八重山諸島と台湾島との間で目視可能な関係が一方的であるといえる。

3. 環境と先史文化

(1) 亜熱帯気候とサンゴ礁

琉球列島の気候風土を特徴づけるのは、亜熱帯気候とサンゴ礁である。

亜熱帯気候の定義について、琉球列島になじむ気候学上の説明は一致していないが⁽⁶⁾、日本では「月平均気温が20℃以上」という「熱帯的な月が1年の過半を占めるところ」が亜熱帯とされている(中村1990、191p.)。これによると月平均気温が20℃以上の月は種子島で6ヶ月、奄美大島で8ヶ月なので、トカラ列島のどこかに温帯と亜熱帯の境界があることになる。地理学者の目崎茂和氏は植生・

土壌・地形をとりあげて、「照葉樹林と亜熱帯林の境は屋久島と奄美大島の間に引かれ」ること、土壌では「湿潤亜熱帯の産物」である「成帯性の赤黄色土の分布が奄美大島以南」であること、サンゴ礁がトカラ海峡以南にしか生育しないこと、「トカラ列島の小宝島以南にしか琉球石灰岩が分布しないこと」を指摘している（目崎1985、pp.44～45）。これによると、亜熱帯の特徴はトカラ列島南半部で始まっていることになり、気温による先の区別と整合する。このほかに亜熱帯とは「限りなく熱帯に近くて、しかし、冬がある」気候という中村和郎氏の表現はわかりやすい（中村1990、p.191）。

琉球列島の自然環境のもう一つの特徴は、サンゴ礁である。サンゴ礁とは、「海底から海面からそれに近い位置まで高まり、防波構造を造っている特異な生物地形である」（堀1990、3p.）。琉球列島のサンゴ礁は完新世の初期に発達したもので、ほとんどは島と石灰質の高まりとの間に浅い池をつくりつつ島をとりまく形状をなしている。このようなサンゴ礁は、裾礁と呼ばれる⁽⁷⁾。

ところでサンゴ礁は通常熱帯に多い海岸地形である。琉球列島の位置する北半球の高緯度地域（北緯26°～30°）になぜサンゴ礁が形成されたかという点、それは北赤道海流に源をもつ、高温（冬でも18℃をくだらない）で塩分濃度が高く（34～35‰）澄んだ海水をもつ黒潮海流が島々に沿って北上しているからであり、また同時に、島々が大陸の大河の河口から遠いところに位置しているからである。これがサンゴを育て、さらにサンゴ礁を形成させたのである（沖縄第四紀調査団・沖縄地学会1975、pp.21～22）⁽⁸⁾。同じ緯度にあっても中国東南部沿岸地域にサンゴ礁が発達しないのは、

表2. 琉球列島における島どうしの目視可能な関係

島番号	地理名称		目視できる 北側の島番号*1		目視できる 南側の島番号*1		分類
1	九州				6	7	I
2	大隅 諸島	黒島	1		6	7	
3		硫黄島	1		6	7	
4		竹島	1	3	6	7	
5		口永良部島	3		9	11	
6		種子島	1	2	7		
7		屋久島	1	5	9	10	
8	トカラ 列島	平瀬	7		9		
9		口之島	7		10		
10		中之島	9		12		
11		臥蛇島	10		12		
12		平島	10		13		
13		諏訪之瀬島	10		14		
14		悪石島	13		15		
15		小宝島	14		16		
16		宝島	14	15	17	18	
17		横当島	15	16	18		
18	奄美 諸島	奄美大島	15	16	19	23	
19		喜界島	18		23		
20		加計呂麻島	18		21	22	
21		請島	20		22	23	
22		与路島	20		21	23	
23		徳之島	20	22	24	25	
24		硫黄島島	23		27		
25		沖永良部島	23		26	30	
26		与論島	25		30		
27	沖縄 諸島	伊平屋島	24	25	28	29	
28		伊是名島	27		29		
29		伊江島	28		30		
30		沖縄本島	25	26	33	34	
31		粟国島	29	30	33	35	
32		渡名喜島	30	31	33	34	
33		渡嘉敷島	30		34		
34		座間味島	30		35		
35		久米島	31	32			
36	宮古 諸島	宮古島			37	38	
37		伊良部島	36		38		
38		下地島	36		39		
39		来間島	36				
40		水納島	36		42		
41		多良間島	36	40	42		
42		石垣島	40	41	43	46	
43		竹富島	42		45		
44		小浜島	42		46		
45		黒島	42		46		
46	八重山 諸島	西表島	42	44	47	48	
47		新城島	46		48		
48		波照間島	46		47	50	
49		与那国島	46		50		
50		台湾島					

* 1 : 該当する島が多い場合は2島で代表させている

* 2 : 久米島と宮古島

* 3 : 宮古島と水納島、宮古島と多良間島

* 4 : 波照間島と台湾島、与那国島と台湾島

海水そのものがサンゴ礁を形成する条件を満たしていないためである。琉球列島は、温帯域に赤道地域から触手のように伸びた熱帯的世界といえることができるだろう。

(2) 裾礁の成立と先史文化

琉球列島の裾礁は、世界のサンゴ礁の分布域においては周辺域にある北限のサンゴ礁で、小規模なものが多い。陸からサンゴの高まり（礁原）までの幅が数百メートル、その間の礁湖の深さも多くは5 m以浅であることから、現在の人々は干潮時に浅瀬を歩いて礁原に至り、海藻やタコ、シャコガイなどを比較的易に捕獲している。浜近くに礫を囲っておき、満ち潮にのって岸に寄る魚を、引き潮を利用してとる工夫は琉球列島にひろくみられた伝統的漁法である。礁原は深い切れこみをもつ複雑な形状をなし、諸処に外海との通路をつくっているため、引き潮とともにここを通過して外側に出ようとする魚の通路に網をしかける漁が、先史時代後半にはあったと推定される⁽⁹⁾。貝塚にのこるジュゴンやイルカの骨は、満潮時に礁湖に入って浅瀬に乗り上げた個体が捕獲されたこと推測させる。礁斜面のやや深いところに棲むチョウセンサザエやサラサバテイは、大潮時を選んで捕獲したのであろう。ときには潜水してヤコウガイなどもとったであろう。サンゴ礁が小規模であることから、人々はサンゴ礁の隅々に至って複雑な地形や生態に親しみ、身近な道具を工夫することで多様な生物を捕獲した⁽¹⁰⁾。季節によって寄る魚の種類や育つ海藻、旬の貝はことになったが、海の幸は年中枯れることがなく、その保存に腐心する必要はなかったであろうことが、現在の民俗から推定できる⁽¹¹⁾。またサンゴ礁は外海からの波を防いで海辺の集落を守る防波堤でもあった。台風の多い琉球列島において、この生物地形のもつ意味は大きい。

以上から、裾礁が琉球列島の人々にとって、海辺の生活の安全と食料を保証するきわめて有効な舞台装置であることが理解される。島を囲む海は、裾礁の恩恵によって、人々の挑戦の対象ではなくむ

しろ深い揺籃になっているといえないだろうか。

サンゴ礁形成に関する最近の研究成果によると（菅2001、2010）、琉球列島のサンゴ礁は「完新世初期における黒潮の流路変遷を機に開始されたとみられ」、8500～7900年前に海底で形成が始まり（菅2010、24p.）、約3500年前には現在に近い形になったとされる。新石器時代における琉球列島人の生活はこの間の7900～6500年前に始まっており（嘉手納町野国貝塚B地

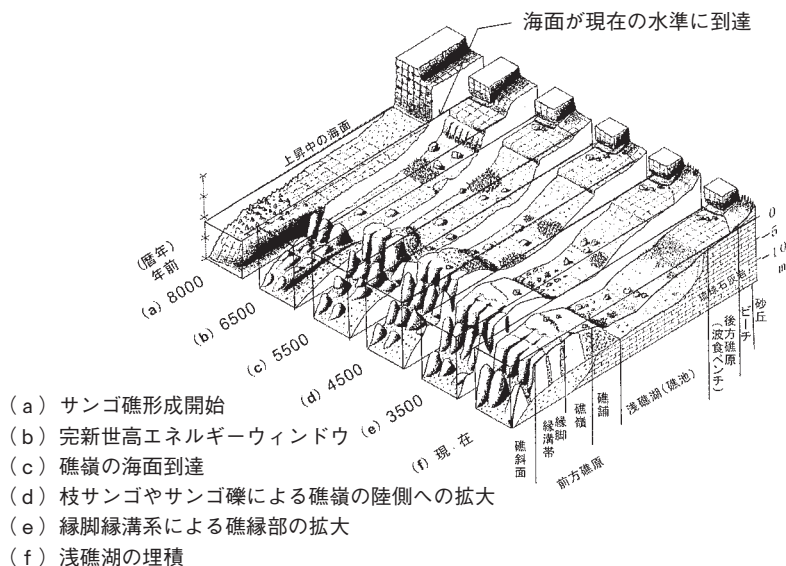


図2 琉球列島における現成サンゴ礁形成模式図

久米島・水納島（沖縄諸島）の実例に基づく模式図（菅2010図2にもとづく）

点、宜野湾市・北谷町新城下原第二遺跡、読谷村渡久知東原遺跡⁽¹²⁾、北谷町伊礼原遺跡⁽¹³⁾など)、この時期の遺跡には、イノシシなど陸獣のほかにサンゴ礁の浅海に棲息する生物（海獣・魚類・貝類）遺体が多く残されている。約3500年前以降は遺跡数が増加し（高宮2005）、遺跡から出土する食料の多くをサンゴ礁の生物遺体が占めるようになる。琉球列島にのこる遺跡や遺物は、先史時代人の生活がサンゴ礁の形成とともに展開してきたことをよく示している。

琉球列島の先史時代は、紀元前5千年紀から紀元10世紀まで約6000年にわたって継続した。この時代は、沖縄諸島では縄文時代・弥生平安併行時代⁽¹⁴⁾あるいは沖縄貝塚時代前期・同中期・同後期⁽¹⁵⁾という独自の名称で呼ばれている。後者は、この時代が貝塚時代として包括される採集経済の時代であったことを表示している。時代名称は異なるが、このことは同じ裾礁環境にある奄美諸島や先島諸島にもあてはまる。つまり先史時代の琉球列島の大部分は、裾礁環境における文化として把握することが可能である⁽¹⁶⁾。

4. 裾礁型文化

(1) 裾礁型文化の特徴

わたしはかつて奄美・沖縄地域に展開した装身文化と縄文文化のそれを比較し、前者を裾礁型先史文化として捉えたことがある⁽¹⁷⁾。前段の検討でサンゴ礁の形成が琉球列島の先史文化全体に影響をもつことが了解されたので、今回この概念を生活全般に広げて検討してみたい⁽¹⁸⁾。

裾礁型文化を、裾礁の存在によって成立する生業に依拠して展開した生活文化、と定義しておこう。奄美・沖縄地域の考古資料をもとに、その具体的な特徴を以下に列挙する。

- ① サンゴ礁地形の全面的使用：人々は裾礁内のさまざまな部位（砂丘・後方礁原・浅礁湖・前方礁原・礁斜面）を活用して、海藻・貝類・魚類・海獣類を得た。
- ② 漁労具の未発達：海浜の一定の場所を低い石垣で囲う装置による漁や突漁が普遍的だったとみられるが、遺構や遺物として残存していない。木製の突道具が存在していた可能性がたかい。釣漁は未発達で、先史時代後半には貝殻を錘にした網漁が発達した。
- ③ 貝殻素材の生活文化への積極的使用：狩猟を除く生業の道具（錘、斧、ナイフ、突き具など）、生活道具（食器、煮沸具、匙など）、装身具・装飾品の製作において、さまざまな貝殻を積極的に使った。これに対し石材の利用についての工夫は乏しかった。
- ④ 精神文化のサンゴ礁環境への依拠：シャコガイを死者に添えたり魔除けに使用したりする習俗、鮫歯を垂飾にする装身習俗が普遍的だった。イヌやイノシシもいたが、精神文化との関わりは不明瞭である。
- ⑤ 独自の造形的志向：工芸素材に大型巻貝・海獣骨を好んで使用した。貝殻の形や文様、ことに赤い色彩を好んだが真珠光沢への執着は弱く、本土地域に見られるような緑色への嗜好はない。美石への執着がなく、石製装身具は発達しなかった。
- ⑥ 工芸技術の未発達：貝殻を割り、擦り切り、磨き、複雑なシンメトリー形状に加工する技術が発達する。刃器によってその表面に細かい文様彫刻を施したり動物や貝殻・人間を写真的に模したりすることも希。

サンゴ礁環境に直接かかわらない部分では、以下の特徴がある。

- ⑦ 生活基盤の安定性：狩猟・漁撈・採集を主体とする経済が長期に継続し、生産経済社会との長期の接触によってもこの経済方針を変化させることはなかった。
- ⑧ 堅果類使用の継続：堅果類を主食としていた可能性が高く、独特の粉碎具セットが先史時代を通して存在した。
- ⑨ 利器の未発達：ナイフなどの刃器、石鏃などの飛び道具、争いの道具としての武器や武具は発達しなかった。
- ⑩ 緩慢な変化：土器は深鉢と壺を主体とする単純なセットが基本で、その形態変化は連続的でゆるやかであった。
- ⑪ 社会的分化の未発達：墓において、身分の上下を想起させる埋葬方法の区分は認められていない。

(2) 文化圏区分と裾礁型文化

琉球列島の先史文化の内容をもとに、これをはじめて区分したのは國分直一氏である。その後ことなる区分名称も提示されているが⁽¹⁹⁾、列島全体を包括する区分としてここでは前者を紹介したい。

國分直一氏は琉球列島の考古資料に依拠してこれらを3つ文化圏に分け、その特徴を以下のようにまとめた⁽²⁰⁾。

- ・南島⁽²¹⁾北部圏：トカラ列島悪石島以北の地域。九州の文化圏の影響を強くうける地域。
- ・南島中部圏：トカラ列島宝島以南の地域。九州の文化とは異なる独自の文化をもつ地域。
- ・南島南部圏：先島諸島。台湾・フィリピンとの関係が予測される地域。

文化圏区分と裾礁型文化との対応を示すと、以下のようになる。

- ・南島北部圏：未発達の裾礁であるエブロン礁はみられるが、裾礁型文化は成立していない。
- ・南島中部圏：裾礁型文化が展開する。
- ・南島南部圏：裾礁とともに、これの一層発達した石西堡礁（目崎1988、136p.）がある。南島中部圏の裾礁型文化とは内容を異にする裾礁型文化が独自に展開する。

(3) 裾礁型文化の保守性

琉球列島と九州との間には先史時代を通して断続的に人の移動が認められている。それらは土器、黒曜石（小畑ほか2004）、貝製品（木下1989、1996）によって考古学的に追跡されてきたが、人の動きがもっとも明瞭なのは、九州の弥生時代から古墳時代の1000年以上にわたって継続した貝殻の交易（貝交易）においてである。これは九州島の人々がサンゴ礁域の大型巻貝の貝殻を使って特別な腕輪をつくり始めたことに起因している。九州島の人々は貝殻を入手するために穀物や金属器を交換物資として準備し、沖縄諸島に到る間の運搬を九州島と沖縄諸島の間位置する島の人々に頼り、多くの手間と地域を介して貝殻を入手したのである。

相互に1000kmも離れた北部九州と南島中部圏との間に交易が成立したのは、九州にはない物産で、北部九州に需要のある大型巻貝が沖縄諸島にのみ豊富に存在したからである。この経済関係が長期間にわたって継続したのは、沖縄諸島に北部九州にはない物産の種類が多く、これらを適宜提供することで時代ごとに変化する九州の消費の内容にうまく対応できたことがおもな要因である。これを支えたのが南島中部圏のサンゴ礁環境だったのはいうまでもない。この間、両者の中間に位置し、貝殻を多く産出しない島嶼地域の人々は、もっぱら九州と沖縄諸島間の貝殻運搬の役割を担った（木下2005

a)。九州島から沖縄諸島までの島々が、いずれも目視できる関係にあったことも、この交易を継続させる背景として重要である（表2参照）。

1000年ほども継続したこうした交易を介して、南島中部圏の文化には、九州文化との接触によるとみられる変化が生じるが、一時的なものを除けば、その影響は奄美諸島の土器の形状変化に留まり、沖縄諸島に及ぶことはなかった。またこの間、南島中部圏に恒常的にもたらされたであろう交易品の延長上にある金属製品や食糧生産技術を、奄美・沖縄人が積極的に獲得しようとする動きはほとんど認められていない。文化の動きは常に北から南に向かうのみで、南から北に向かう動きは不明瞭である（木下2005a）。

貝交易が展開した間、南島中部圏では現在とかわらぬ形状に達した裾礁を背景に裾礁型文化が開花し、地域ごとに安定性の高い在地文化が展開する⁽²²⁾。彼らにとってこの安定性こそが重要であり、異文化との接触を求めてあえてサング礁世界を出てゆく必然性はなかったとみられる。

5. 人の移動と裾礁型文化

(1) 琉球列島人の移動の動機

考古学で人の移動を検討する場合、そのことを示す物的証拠が必要である。偶発的あるいは一回限りの行為であれば、多くの場合その空間には遺物も遺構も残されないであろう。物的証拠をのこさない行為は、たとえその行為が存在したとしても考古学的にはなかったと見なさざるをえない。以下の「移動」は、くり返し生じ、物的証拠をのこす行為という意味で使うことにする。

裾礁型文化に身を置く琉球列島人が、自分の島を離れて異なる島に移動する場合、島が目視できることはその前提であろう。宮古島と石垣島の間にある多良間島の場合、石垣島と多良間島は双方に目視できる。現在、多良間島が八重山諸島最古の土器である下田原式土器（4300～3200年前）の分布の東端であることは（岸本ほか1996）、下田原期の八重山諸島人が彼らの見える範囲まで移動したことを示している。多良間島から宮古島もみえるのであるが、今のところ宮古島にはまだ下田原式土器は発見されていない。これは宮古島から多良間島が目視できないことに関わっているのかもしれない。

しかしこの限界も経験知の蓄積によって突破される。先島諸島の下田原期の次の時期（2200年前前後）には宮古諸島でシャコガイ製貝斧が、土器を使わない文化の特徴的な道具として登場する。このシャコガイ斧は宮古諸島・八重山諸島全域にみられるため、多良間島と宮古島の間の海域は、この時期には突破されていたことがわかる（安里1994）。

目視できればそれだけで人が移動するとは限らない例もある。硫黄島は徳之島からも伊平屋島からも見える島であるが、この島に人の足跡がみられるのはグスク時代以降である（盛本2002）。先史時代にも、この島にたどり着いた人のいたことは想像に難くないが、硫黄島に文化を残すほど長い時間の接触はなかったらしい。噴火をくり返す硫黄臭の島に人は住もうと思わなかったのであろう。ただこうした島にも、15世紀には人々が登場している（盛本2002）。中国（明）に届けるための硫黄の採掘が琉球国によって開始されたためである。経済的動機があれば環境のなじまない島にも人々が移動してゆくことを示す好例である。

貝塚時代後期に継続した九州人との貝交易も、経済的動機によって人々が移動した例である。中間で貝殻や交易品を運搬した島人は、交易に参加することで某かの交換物資をえていたのであろう。こ

の交易は島どうしをリレーのようにつないで成立していたので、島人が実際に移動する範囲は隣接する島までであり、簡単に往復できる範囲であったと推定される。

以上から、裾裾型文化の人々の移動には、以下のような条件の必要なことがわかる。

- ・視覚的条件：目視可能である
- ・環境の適合性：快適に生活できる
- ・経済的要因：経済上の必然性がある
- ・技術的条件：航海上の技術・知識が十分である

表3. 琉球列島における島嶼間の移動の条件

分類	視覚的条件	環境	経済的要因	技術的条件	移動の可否		類例
I	目視双方可	適合	不問	みたす	可		①
		非適合	ある	みたす	可		②
			なし	みたす		否	③
II	目視片方不可	適合	不問	みたす	可		④
				みたさない		否	⑤
		非適合	ある	みたす	可		⑥
			不明	みたす		否	⑦
III	目視双方不可	不問	ある	みたす	可		⑧
				みたさない		否	なし
			なし	不問		否	⑨

類例の説明

- ① 表2における分類Iの島々の関係。
- ② 15世紀以降の硫黄島と伊平屋島との関係。硫黄採取が目的。
- ③ 先史時代の硫黄島と伊平屋島・徳之島との関係。
- ④ 約2200年前における宮古島と多良間島との関係。
- ⑤ 下田原期（4300～3200年前）における宮古島と多良間島との関係。
- ⑥ 今のところ不明。
- ⑦ 台湾と八重山諸島の関係か（後述）
- ⑧ 11世紀末以降の九州島・沖縄諸島と先島との関係。ヤコウガイ採取が目的。
- ⑨ 11世紀中頃以前の久米島と宮古島との関係。石垣島と魚釣島との関係。

の具体的関係の証左はみつからず、1990年代以降の先島諸島の考古学は、台湾との関係の追究より、シャコガイ製貝斧を介したフィリピンとの関係の追究に進んだ感がある（安里1994）。

台湾大学の陳有貝氏は琉球列島と台湾島との文化交流の問題についてもっとも先鋭的に追究した考古学者である。氏は台湾側からこの問題に挑み、以下の結論を導いた（陳2008、2009）。

- ・台湾の先史社会は約4000年前に農耕を経済基盤とする安定した社会を形成しており、食糧不足による人口圧から島外に移住する必然性はなかった。

以上をまとめると表3のようになる。

(2) 台湾島と

八重山諸島との関係

a. 台湾島からの視点

台湾島と八重山諸島との間に文化的な交流が存在するであろうことは早くから予想されており、1970年代國分直一氏は台湾島北部沿岸地方のケタガラン系原住民の祖先がのこしたとみられる苑裡貝塚（台湾島西北部）の印紋陶器片と波照間島で採集した格子目叩きをもつ土器片との類似を指摘した（國分1972b、44p.）⁽²³⁾。1980年代白木原和美氏は台湾東海岸と琉球列島との関係を探るため、その先史時代遺跡の悉皆的な踏査を行った（白木原1986）。こうした先学の追及にもかかわらず、八島山諸島と台湾島と

- ・台湾の先史時代人にとって、環境のことなる琉球列島は農業を展開する上で適地ではなかった。
- ・台湾の先史時代人はオーストロネシア語族であった可能性が高く、八重山諸島の人々はそうであった可能性は低い。異なる語族間の交流には困難が多かった。

陳氏は台湾と琉球列島の関係を、台湾東海岸や八重山諸島に特定して議論しているのではないが、経済と言語レベルの違いを根拠に、台湾島側から八重山諸島に人が移動する歴史的要因のなかったことを導いている。

b. 八重山諸島からの視点

台湾島と八重山諸島の関係を、台湾東海岸と八重山諸島西部の与那国島・波照間島について検討しよう。八重山諸島が台湾島東海岸から目視できないことを考慮すると、この場合は表3の⑦に対応する。与那国島と波照間島からは台湾島がみえるので、八重山諸島と台湾の間には前者から後者に向かう最低限の条件は備わっていたとみていい。八重山諸島内でも、相互に65km離れた西表島と与那国島には同じ内容の先史文化が存在するので、これよりやや遠い108km離れた台湾島の状況を八重山諸島の先史人はおそらく知っていたであろう。

台湾東海岸の自然環境をみてみよう。台湾島の北半分は亜熱帯気候で、南半分は熱帯気候区とされるので、台湾島の気候は八重山諸島より若干暑い。八重山諸島に直面する台湾東海岸は、南北380kmにわたって断崖が屏風のように屹立する隆起海岸であり、八重山諸島にもっとも近い東海岸北半部は岸壁が300m～1200mの落差で海中に没している。東海岸の東北隅や蘇澳、中部以南豊濱、三仙台には裾礁がみられるとはいえ（何ほか2002）、台湾島が隆起しつつあるため礁湖は発達していない。干上がった礁嶺の続く海浜の風景は、八重山諸島のそれとかなり異なる。台湾島と八重山諸島の生活環境には、100余kmの海域をはさんで大きな違いがある。

経済的動機の可能性についてみてみよう。大規模な山地を背後にもつ台湾島には豊富な山林資源（植物・動物・鉱物資源）がある。またそこには一定水準に達した農耕文化があり、硬質で均整のとれたデザインの食器のセット、高い技術によりつくられた玉製装身具等がある。これらは八重山諸島にはなく、八重山諸島人がこれらを欲すれば、彼らが台湾に赴く十分な動機になる。ただこれまでのところ八重山諸島の先史遺跡から台湾との関係を思わせる遺物は出ていない。

台湾東海岸の先史文化を具体的にみよう。八重山諸島の先史時代前半（4300年～1800年前）に並行する時期の台湾島東海岸の代表的先史文化は卑南文化である。この文化は東海岸南部台東県の卑南遺跡を標識とし、5300年～2300年前の年代が与えられている。台湾大学の宋文薰氏・連照美氏によっておこなわれた卑南遺跡の発掘成果によると、卑南文化の人々は農耕と狩猟を主要な生業として漁労はあまり行わず、土器・石器の製作や紡織をよくし、生活にかかわる儀礼をよく行い、玉加工に高いレベルの技術をもち、地下に墓をもつ住居に住み、風習の抜歯習俗、檳榔を噛む習慣、頸狩りの習俗をもっていたとされる（宋・連2004、連2006・2008）。

八重山諸島人は台湾東海岸にすむ先史人のこうした文化を知っていたであろう。豊富な内容の文化に接し、あるいは交易を欲したかもしれない。しかし抜歯を施した容姿に檳榔を噛んだ赤い口をもち、首狩の風習をもつ人々に実際に遭遇して、ただちに交渉を始めるには至らなかったのではないだろうか。また海岸環境が故郷とは大きくことなる台湾東海岸に、進んで生活の拠点を設けることもできなかったのではないだろうか。環境の差、文化の差の大きさが、積極的な交流を阻んだ可能性は高いと

思う。

(3) 裾礁型文化の境界

八重山諸島の台湾島との交流の可否は、八重山諸島側が台湾島に働きかけるか否かによっている。八重山の人々にとって自然環境や文化レベルの差が大きく、台湾島側への接近が容易でなかったとしても、時間の経過とともに経験知が蓄積され、文化的な誤解が解けて相互理解が深まり、新たな経済的動機が生まれる可能性は十分ある。しかし結局八重山諸島と台湾島との交渉は13世紀後半までみられなかった⁽²⁴⁾。何故なのか。

この問題には時間をかけて取り組むべきだと思うが、わたしには台湾島に対する八重山諸島人のこうした反応が、南島中部圏の島々が貝交易を介して対峙した九州島へのそれと共通するように思えてならない。つまり、裾礁型文化のもつ安定性が、異文化への接触を消極的にしたのではないかと思うのである。この見通しが成り立つのであれば、八重山諸島は裾礁型文化の西南の境界域といえるだろう。

6. 結語

先史時代の琉球列島にみられる「北に開き、南に閉じ気味」の文化的位相は、九州島から双方向に目視できる島が南島中部圏まで連続し、かつ琉球列島への九州島の経済的需要が継続したから北に開き、南島南部圏ではその南端から台湾島までの目視関係が連続せず、かつ八重山諸島に対する台湾島側からの経済的需要がなく八重山諸島から台湾島への接触もなかったためにその南には閉じていたことに因る。そこに通底するのは裾礁型文化の安定性であった。これが小稿の結論である。

小稿は「馬祖列島における海洋環境と文化国際シンポジウム」(2011年10月28日～30日、中華民国中央研究院人文社会科学研究センター考古学研究専門センター・連江県文化局共催)で発表した「關於史前時代琉球の海洋環境と文化」をもとに、会議での討論を参考にして発表原稿を全面的に書き直したものである。

小稿をまとめるにあたり、台湾大学人類学系の陳有貝副教授にご教示を賜った。同じく宋文薫教授、連照美教授、中央研究院歴史語言研究所の陳仲玉教授、臧振華教授、劉益昌教授、ドイツ考古学研究所篠藤マリア氏、石垣市立八重山博物館島袋綾野氏との意見交換では得るところが多かった。またある島からどの島が見えどの島が見えないのかについて、多くの知人と地方公共団体の観光課、総務課にご教示いただいた。記して感謝いたします。

注

- (1) 琉球列島の地理的内容は、以下のとおりである。琉球列島の地理は加藤幸弘ほか2001pp.217～325に詳しい。

琉球列島

薩南諸島 大隅諸島(種子島、屋久島、口永良部島、馬毛島等)

吐噶喇列島(口之島、中之島、平島、諏訪之瀬島、悪石島、小宝島、宝島等)

奄美諸島（奄美大島、徳之島、沖永良部島、与論島等）

琉球諸島 沖縄諸島（沖縄本島、伊是名島、伊平屋島、伊江島、慶良間列島、久米島等）

先島諸島

宮古諸島（宮古島、多良間島等）

八重山諸島（石垣島、西表島、与那国島、波照間島等）

なお、天気予報等で使用される南西諸島は、琉球列島に大東諸島と尖閣諸島を加えた範囲をさす。

- (2) 河口貞徳氏は薩南諸島を中心に、高宮廣衛氏は沖縄諸島を中心に研究された。
- (3) 陳有貝氏による一連の研究がある（陳2002・2005・2008a・2008b・2009）
- (4) 琉球列島の島々は地理学者の目崎茂和氏によって高島と低島に分類されている。これは本来ジェームズ・クックによる洋島の識別方法であったものを、目崎氏が琉球列島の島の類別に応用したもので、以下のような分類である。

高島：大陸島

低島：低サンゴ島・隆起サンゴ島

これらは地形・地質を同時に表しており、土壌・水文をも包括する合理的な分類として島の生態系の理解に有用である。

- (5) 該当する島が2島以上ある場合は、もっとも遠距離にある島名を優先的に示した。
- (6) 前島郁夫氏、目崎茂和氏、中村和郎氏らによる（目崎1985、前島1989、中村1990）。
- (7) サンゴ礁は発達程度により、裾礁、堡礁、環礁、卓礁、離礁に区別されている。「裾礁は陸地と礁原との間に礁湖とよばれる内海を抱き、幅が数百m以下の連続性のよい礁原が陸地をとり囲むように文字通り裾状に発達している礁である。」「日本の奄美・沖縄の琉球列島に沿うものはほとんどが裾礁である。」（堀1990、pp.10～11）
- (8) 「サンゴ礁をつくるサンゴの生育には、18～36℃の海水温と、27～40‰の塩分濃度が適当とされているので、沖縄の海はこの条件に十分かなっていることになる。」（沖縄第四紀調査団・沖縄地学会1975、22p.）
- (9) 穿孔された同じような大きさの二枚貝（有孔貝製品）を網の錘とみていることが根拠（島袋春美2004）。
- (10) 同じサンゴ礁環境でも、熱帯地域の堡礁や環礁など規模の大きなサンゴ礁は、礁湖の深さが数十メートル、幅は数キロメートルあるため、人間のかかわり方は琉球列島とはかなり異なっている。この点で、琉球列島のサンゴ礁は人間にとってふさわしい規模といえるかもしれない。
- (11) 恵原義盛氏や渡久地健氏のすぐれた報告・研究がある（恵原1973、渡久地2010）。
- (12) 河名俊男氏による校正值を示す（河名2010）。いずれも1σ。
野国貝塚B地点：cal BP7900～7700（無文の先爪形文土器）
新城下原第二遺跡：cal BP7300～6800（爪形文土器）
渡久知東原遺跡：cal BP7600～7200（爪形文土器）
野国貝塚B地点：cal BP7000～6500（爪形文土器）
- (13) 伊礼原遺跡の爪形文土器出土層の¹⁴C年代は「6800～6000年前」とされる（北谷町教育委員会2010）。
- (14) 沖縄県史によってあらたに提示された時代区分（安里ほか2003）。
- (15) 沖縄県考古学会による区分（沖縄県考古学会1978）。
- (16) 安里嗣淳氏は、早く沖縄諸島の先史文化を「サンゴ礁文化」と呼んでいる。「但し、貝塚の内容は陸産の食糧（イノシシなど）残滓も顕著であり、海洋との関わりを強調しすぎてこの点を見落としてはならない。」として積極的な使用を控えている（安里1992）。わたしは、そのサンゴ礁が裾礁で

あることが重要だと考えている。

- (17) 九州・奄美・沖縄3地域の腕輪・垂飾・牙玉・鮫歯・連珠・耳飾・蝶獣形骨製品を比較した結果、その装身具文化が奄美地域をはさんで異なっていることがわかった（木下2005）。
- (18) 時間を限定しない方が概念として使いやすいため、「裾礁型先史文化」から「先史」を除いた。
- (19) 安里嗣淳氏は、奄美諸島から八重山諸島までの地域がグスク時代以降に「文化的共通性のつよい圏域」になったことを重視してこれを琉球圏とし、奄美・沖縄諸島を「北琉球諸島圏」、先島諸島を「南琉球諸島圏」として区分した（安里1991）。その後この文化圏区分を先史時代に遡及させ、内容上はトカラ列島以北の琉球列島をも包括させうる「北琉球圏」と「南琉球圏」としている（安里2011）。
- (20) 國分氏が「トカラ諸島全域の状況は不明であるが、少なくとも、宝島は南島中部の文化圏に属することが明らかになった。」として、宝島の文化を南島中部圏に所属させている点は、この島が裾礁の北限と対応している点において重要である（國分1972a, p.156）。なお、國分氏が南島中部圏・南島南部圏の用語を使用したのは、1972『日本民族文化の研究』においてである（國分1972b）。
- (21) 日本で一般に使用する「南島」はいわゆる南島語族 Austronesian の南島ではなく、琉球列島のことをさす。これは日本独自の歴史的用語で、『続日本紀』文武天皇2年（西暦698年）に種子島・屋久島・奄美諸島等をさす総称として登場したことに拠っている（原文では多嶺・夜久・奄美・度感）。その示す地理的範囲は時代とともに拡大し、最終的に現在の琉球列島と同じになった。
- (22) 文化人類学者の高宮広土氏は、人類が島に適応することを問題にしたスティーブン・ミズン Steven Mithen とパトリック・カーチ Patrick V. Kirch の理論を琉球列島の先史時代に応用し、キャリーング・キャパシティー Carrying Capacity モデルと考古資料の分析から、貝塚時代後期を人口増加と自然環境の均衡がとれていないフード・ストレス food stress のある時代代とした（高宮2005、2010）。たしかにフード・ストレスはあっても、裾礁はそれを補って余りある回復力を備えた環境だとわたしは捉えている。
- (23) 2010年、國分直一氏の考古資料が台湾大学図書館に一括して寄贈された。わたしは台湾大学陳有貝氏の厚意でこの土器片を探したが見つかることはできなかった。
- (24) 13世紀後半以降、台湾島を介して福建から貿易船が北上した可能性が指摘されているが（木下編2009）、この場合も台湾島と八重山諸島の関係が直接的であったかどうかは明らかではない。しかし15世紀後半にのこされた記録（『済州島民漂流記』『李朝成宗大王実録』所収）の記録から、与那国島の習俗が台湾原住民のそれに共通するという指摘がある（黄2010）。13世紀以降、台湾島との民間交流がさかんになった可能性がある。

文 献

- 安里嗣淳 1991「中国唐代貨幣『開元通宝』と琉球圏の形成」『文化課紀要』第7号、沖縄県教育委員会文化課、pp.1～10。
- 安里嗣淳 1992「沖縄の貝塚 サンゴ礁文化の諸相」東アジア考古学会における発表記録、安里2011、pp.113～130に再録。
- 安里嗣淳 1994「沖縄のシャコガイ製貝斧概観」『琉大史学』第14号、琉大史学会、pp.87～100。
- 安里嗣淳 2011「第1部 第1章1 沖縄考古学総説」『先史時代の沖縄』第一書房、pp.3～6。
- 安里嗣淳・池田榮史ほか 2003『沖縄県史 各論編第二巻』財団法人沖縄県文化振興会・公文書管理部史料編集室編、沖縄県教育委員会。

- 恵原義盛 1973『奄美生活誌』木耳社。
- 沖縄県考古学会 1978『石器時代の沖縄』新星図書。
- 沖縄第四紀調査団・沖縄地学会 1975『沖縄の自然 その生い立ちを訪ねて』平凡社
- 小畑弘己・盛本勲・角縁進 2004「琉球列島出土の黒曜石製石器の化学分析による産地推定とその意義」『Stone Sources 石器原産地研究会会誌』no.4、pp.101～136。
- 片桐千亜紀ほか 2006『新城下原第2遺跡』沖縄県埋蔵文化財センター調査報告書第35集。
- 河口貞徳 1981『河口貞徳先生古稀記念著作集』上巻・下巻、河口貞徳先生古稀記念著作集刊行会。
- 加藤幸弘・太田陽子・中森亨・大村明雄・河名俊男・成瀬敏郎・目崎茂和 2001「4. 南西諸島」『日本の地形7 九州・南西諸島』町田洋・太田陽子・河名俊男・森脇広・長岡信治編、東京大学出版会。
- 何立徳・王鑫編著 2002『臺灣地理百科06臺灣の珊瑚礁』遠足文化事業有限公司。
- 河名俊男 2010「琉球列島におけるサンゴ礁の形成史と地震・津波」『考古学リーダー19 先史・原史時代の琉球列島～ヒトと景観～』六一書房、pp.63～86。
- 菅浩伸 2001「(2) 南西諸島を縁どるサンゴ礁海岸」『日本の地形1 総説』東京大学出版会、pp.255～258。
- 菅浩伸 2010「琉球列島におけるサンゴ礁の形成史」『考古学ジャーナル』no.597、ニューサイエンス社、pp.24～26。
- 岸本義彦編 1996『多良間添道遺跡発掘調査』多良間村文化財調査報告書第11集、多良間村教育委員会。
- 岸本義彦ほか 1984『野国貝塚群B地点発掘調査報告』沖縄県埋蔵文化財調査報告書第57集、沖縄県教育委員会。
- 木下尚子 1989「南海産貝輪交易考」『横山浩一先生退官記念論文集I 生産と流通の考古学』、横山浩一先生退官記念事業会、pp.203～250。
- 木下尚子 1992a「辟邪の貝—しゃこがい考」『比較民俗研究』第6号、筑波大学比較民俗研究会、pp.5～39。
- 木下尚子 1992b「南島の古代貝文化」『MUSEUM 東京国立博物館美術誌』no.491、pp.4～15。
- 木下尚子 1996「古墳時代南島交易考」『考古学雑誌』81巻1号、日本考古学会、pp.1～81。
- 木下尚子 2005a「貝交易からみた異文化接触—温帯と亜熱帯の接触—」『考古学研究』第52巻第2号、考古学研究会、pp.25～41。
- 木下尚子 2005b「縄文時代二つの装身文化—九州・奄美・沖縄の装身具比較—」『九州の縄文時代装身具』第15回九州縄文研究会沖縄大会、九州縄文研究会沖縄大会実行委員会、pp.44～52。
- 木下尚子(編) 2009『13～14世紀の琉球と福建 13～14世紀の琉球と福建』平成17～20年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書、熊本大学文学部。
- 金武正紀・當真嗣一 1986「沖縄における地域性」『岩波講座 日本考古学 5文化と地域性』、pp.323～364。
- 黄智慧 2010「『東台湾海』文化圏の視点から見た与那国の島際関係史」『与那国町史 本巻第2巻 民俗編』与那国町役場、pp.34～51。
- 國分直一 1971『南島先史時代の研究』慶友社。
- 國分直一 1972a『南島先史文化の研究』慶友社。
- 國分直一 1972b『日本民族文化の研究』慶友社。

- 小林達雄 1988『古代史復元 3 縄文人の道具』講談社。
- 島袋春美 2004「奄美・沖縄諸島における漁網錘の形態的研究 (その3)」『南島考古』no.23、沖縄考古学会、pp.1~13。
- 白木原和美 1990「台湾島東海岸先史遺跡調査概要」『台湾東海岸先史学資料集』熊本大学。
- 宋文薰・連照美 2004《卑南考古発掘1980~1982—遺址概況、堆積層次、及生活層出土遺物分析》、国立台湾大学出版中心。
- 高宮廣衛 1978「沖縄諸島における新石器時代の編年 (試案) 沖縄考古学会研究発表要旨 (1978. 6.17.)」『南島考古』no.7、pp.11~22。
- 高宮広土 2005『島の考古学 パラダイスではなかった沖縄諸島の先史時代』ボーダーインク
- 高宮広土 2010「ヒトはいつごろ沖縄諸島に適応したのか」『考古学リーダー19 先史・原史時代の琉球列島〜ヒトと景観〜』六一書房、pp.25~42 北谷町教育委員会2010『国指定史跡 伊礼原遺跡—時空を旅する 伊礼原遺—』
- 陳有貝 2002「琉球列島與台灣史前關係研究」國立台灣大學考古人類學刊」第58期、pp.1~35。
- 陳有貝 2005「從古琉球的歷史發展看台灣」中國東南沿海島嶼考古學研討會論文集、中華民國連江縣政府、pp.303~314。
- 陳有貝 2008a「台湾から見た台湾と琉球の先史関係」『石垣市史考古ビジュアル版』第2巻、pp.63~64。
- 陳有貝 2008b「オーストロネシア語族の研究から見た台湾と琉球の先史関係」『九州と東アジアの考古学—九州大學考古學研究室50周年記念論文集』、pp.919~930、九州大学。
- 陳有貝 2009「從台灣與琉球考古資料看生態選擇與族群擴散人類學與人群的遷徙與重構」國立台灣大學類學系慶祝成立60週年國際會議論文集、pp. 1~18、國立台灣大學人類學系。
- 渡久地健 2010「サンゴ礁の環境認識と資源利用」『シリーズ日本列島の三万五千年—人と自然の環境史 4 島と海と森の環境史』文一総合出版、pp.233~259
- 中村愿・東門研治・松原哲志・島袋春美ほか 2007『伊礼原遺跡—伊礼原Bほか発掘調査』北谷町文化財調査報告書第26集、沖縄県北谷町教育委員会。
- 中村和郎 1990「サンゴ礁を育む島々の気候」『日本のサンゴ礁地誌 1 熱い自然 サンゴ礁の環境誌』、古今書院、pp.189~201。
- 平井泰夫「島」『地理学辞典 改訂版』日本地誌研究所 1991、p.281、二宮書店
- 堀信行 1990「世界のサンゴ礁からみた日本のサンゴ礁」『日本のサンゴ礁地誌 1 熱い自然 サンゴ礁の環境誌』、古今書院、pp.3~22。
- 前島郁雄 1989「亜熱帯気候」『地理学辞典』日本地誌研究所、二宮書店、pp.8~9。
- 目崎茂和 1985a「亜熱帯の島—1978年夏」『琉球弧をさぐる』あき書房、pp.41~48。
- 目崎茂和 1985b「2. 琉球弧の島分類」『琉球弧をさぐる』あき書房、pp.12~20。
- 目崎茂和 1988「石西堡礁 日本一の堡礁」『南島の地形—沖縄の風景を読む』沖縄出版。
- 盛本勲 2002「硫黄島島の考古調査」『沖縄県史 資料編13 硫黄島島』財団法人沖縄県文化振興会、pp.243~272。
- 連照美 2006『卑南遺址発掘1986~1989』、国立台湾大学出版中心。
- 連照美 2008『台湾新石器時代卑南墓葬層位之分析研究』国立台湾大学出版中心。